

芥川龍之介「桃太郎」論

——啓蒙家としての芥川龍之介——

崎 川 美 央

はじめに

「桃太郎」は、一九二四（大正一三）年七月一日発行の『サンデー毎日』に発表された。『サンデー毎日』は日本で初めての総合週刊誌で、大正時代の文化の大衆化の一翼をになった雑誌であった。芥川は創刊号から執筆しており、自死の前月まで作品を発表していた。生前に発表されたものは一六作品あるが、ジャンルや内容にこれといった特徴は見あたらなかった。強いていうならば、「桃太郎」を含む作品の多くが単行本には収録されていない。

あらすじは以下のとおりである。

桃から生まれた桃太郎は鬼が島の征伐を思い立つ。働かない桃太郎を持って余していた老夫妻は言うなりに用意を整えてやり、嬉々として送り出す。桃太郎は途中で犬猿雉を仲間にするが、黍団子は決まって半分しかやらない。犬猿雉はお互いに仲が悪く、桃太郎は口八丁でなんとか伴をさせている。そして楽園のように穏やかな鬼が島に、桃太郎一行は悪逆の限りを尽くす。ついに降参した鬼たちから宝物を巻き上げ、さらに人質の小鬼までさらってようやく桃太郎は

帰る。鬼たちは鬼が島の独立を目指し、桃太郎への復讐を企てるようになる。

この「桃太郎」だけを中心とした先行研究は、一九八二（昭和五七）年五月に『方位』に発表された中村青史氏の「桃太郎」論のみしか見つけることができなかった。このように強烈な風刺作品に対してこれはあまりにお粗末なのではないだろうか。中村氏もその論文中において、これまでの「桃太郎」研究の心許なさを「彼の作品中で、もっとも無視されている作品の一つに違いない」と指摘している。そしてこのような「諷刺のきいた作品」が低評価のままで引きさがつていては「桃太郎」は浮かばれないと訴えている。そしてこの作品の評価として、「プロレタリア文学にかかわる発言を、彼のエッセイでなく文芸作品において見出せる」「桃太郎」は、芥川作品の中でももっと注目されている」と述べている。

しかし、この「桃太郎」という作品はこれまで詳しく論じられたものは少ないといえ、まったく評価されてこなかったわけではない。「芥川龍之介全作品事典」（勉誠出版、二〇〇〇年）の中の「桃太郎」に関連する項目において、「初期プロレタリア文学」のひとつ

であるとか、「時代批判」が痛烈にこめられているとか、「帝国主義日本の戯画」であり「軍国主義の反映」であるなどと多少評価されている。たしかにそうではあるが、私はそれだけではないと考える。私には、彼がこの風刺小説の中にもっといろいろなエッセンスを盛り込んだ気がしてならないのである。そういう視点に立ち、これからこの「桃太郎」を読み解いていきたい。

一 時代背景

まず「桃太郎」が執筆された当時の時代背景をおさらいしておこう。「桃太郎」が書かれたのは、一九二四（大正一三）年である。前年の一九二三（大正一二）年九月には、この時代を語る上では決して無視されてはならない未曾有の危機、関東大震災が起こっている。この危機によって、社会だけではなく文学界もおおいに揺れた。

なかでも特に有名なのが、菊池寛や佐藤春夫らによる芸術論争である。このような危機的状況に際し、自らの実生活よりも芸術活動を取ることできた作家はおそろいかなかったであろう。それが芸術家として許されて良いのかという悲観的な立場を取ったのが菊池であり、所詮実生活に勝ることなどありはしないのだという立場を取ったのが佐藤であった。多くの作家たちがその二つの立場の間で揺れ、自らの芸術論と改めて向き合うこととなった。なかには、震災前後で作風が変化してしまった作家もいた。

しかし、そんな混乱を極めた文壇の中でも芥川は揺らがなかった。むしろ、それを糧としてこれまでよりいっそう強く立ち上がっていきようでさえあった。前章で引用した「妄問妄答」の中で、彼は便

所で用をたす瞬間でさえ芸術のことなどは頭から消え去っているが、別段それに対してなんとも思わないと述べている。要するに、芥川は芸術と実生活をはっきりと区別していたのである。実生活が芸術に優先されるのは「當り前だ」としか思はない¹し、なによりもまず「命あつての物種」だと考えていた。このときの文壇にあつて、この芥川の言説はもつとも現実的であるというのは言い過ぎであろうか。しかし、主流であつた前掲の菊池派と佐藤派よりも、芸術と実生活を割り切つてそのどちらとも向き合つていた彼は、本当に現実と向き合つていたように思われる。こうして見てきてみると、芥川は多分にリアリストの側面を持ち合わせていたことがわかつてくる。

二 「桃太郎」と関東大震災

内容と比較するにあたり、関東大震災の詳細と経緯を簡単に見ていきたい。

関東大震災は一九二三（大正一二）年九月一日（土）、午前一時五八分に起こつた。ちょうど昼食時ということもあり、多くの家庭で火を使つていたことが後の大火災につながつた。震源は東京から南西一〇〇キロメートルの相模湾南西部深さ一三〇〇メートルの海底で、おもに被害が大きかつたのは東京と横浜であつた。この二つの都市のマグニチュードは七、九、最大震度は七を観測し、史上最悪の大地震となつた。最大震度七というと、現在の気象庁の定める定義によれば、震度六強の時点で人間は這わないと動くことができず、飛ばされることもある。固定していない家具のほとんどが移動し、

倒れるという。また第二次世界大戦以前の一般的な家屋の多くは木造建築で、耐震性など望むべくもない作りだったであろう。最大震度七の揺れに襲われた木造家屋の多くは傾き、倒れてしまった。昼時でかまどに火がくべられていた家々が倒壊し、あちらこちらで火災が発生した。さらに震源が海底だったこともあり、海岸に近い場所では津波の被害も少なくはなかった。余震は一二八回を記録し、政府はその日のうちに救援対策ならびに治安維持のための出兵を協議した。この日の夕方四時ごろから、混乱と恐怖で極限状態に近い市民たちの間に不穏な噂が広まりはじめる。

翌日の二日、正午まえに再び地震が発生し、さらに市民の恐怖が煽られ政府は戒厳令を發布。民心の安寧をという大義名分を掲げてはいたが、その背景には前日からの噂があつた。そしてこの日より、出所不明の「社会主義者と朝鮮人が暴動をおこし、各地で放火暴行、井戸に毒を入れている」という流言が各地に広まり、東京周辺で朝鮮人の虐殺というきわめて非人道的な最悪の事件がはじまる。そしてそのさらに最悪であつたことは、下手人の多くが市民であつたことである。東京ではこの時点ですでに民間の自警団や官憲が、手当たりしだいに朝鮮人を捕え、虐殺していた。それは至る所で行われ、警察署でさえ行われたという。

前節のようにきわめて現実的に震災を見つめていた芥川が、震災の翌年に書いたこの「桃太郎」には、その風刺が随所に散りばめられているのである。

前掲の中村氏の論文では、桃太郎の仲間である大猿雉の設定がほとんど既成のものであり、侵略者桃太郎でさえ芥川の独創ではないとの指摘があるが、そのなかにおいて「地震学などにも通じた雉」

という設定だけは独創のようである。そこに、私は関東大震災の風刺を垣間見る。以下にその部分を抜粋してみよう。

しかし彼等は残念ながら、あまり仲の好い間柄ではない。丈夫な牙を持った犬は意気地のない猿を莫迦にする。泰団子の勘定に素早い猿は尤もらしい雉を莫迦にする。地震学などにも通じた雉は頭の鈍い犬を莫迦にする。——かういふいがみ合ひを續けてゐたから、桃太郎は彼等を家来にした後も、一通り骨の折れることではなかった。

雉の地震学が紹介されるのは、この三すくみの図を表現したただ一度きりである。この物語が進んでいく上で、雉が地震学の知識をひけらかすような描写はこれ以後一度も登場しないのである。ではなぜここでわざわざ雉に地震学という設定のみを与えたのかといえば、ひとえにこの作品が関東大震災を風刺しているとほめかす材料のひとつなのではないだろうか。そうであるならば、その後の展開になんら使われずとも納得がいく。震災から一年と経たず、いまだ完全な復興には至らない首都において、「地震」という単語のみでおそらく多くの人々が震災を連想したことであろう。芥川自身もそれは例外ではない。そして、この物語のはじめにそうして読者に無意識にでも震災を想起させておくことで、のちのちの展開が効いてくるのである。

それが作用する大きな風刺はふたつある。

ひとつ目は、震災の混乱に乗じて行われた朝鮮人・中国人大虐殺事件である。桃太郎がようよう鬼が島へ到着し、悪逆の限りをつく

す侵略の場面が、朝鮮人の大量虐殺現場を彷彿とさせるのである。

吉川清氏編の『いわれなく殺された人びと』（青木書店、一九八三年）において、朝鮮人虐殺の場に居合わせながらも助かった方の貴重な体験談が生々しくつづられている。その場面が「桃太郎」と酷似しているように思われる。以下に続けてふたつを引用する。

① 私は、そのじやりの上で（中略）寝てしまつたら、いたくて目がさめてみると、庭には一人もいないの。地震はくるし、外でやじ馬がわあわあ騒いでいて、外から殺しにくると思つて警察の外へみんな逃げちゃつた。俺も逃げようかと思つて警察の裏のへいにのぼつたら、むこうの畑で、逃げたのがみんなつかまつているし、それを見たら、つかまるかもしれないからそこへ下りられないし、警察の中へ入って正門のつかい樹の上へのぼっちゃつて、外をみたら、すごい、牛を殺す屠殺場のよう、真赤にそまつて、どうしようかと思つて樹からそろそろおりて警察の中へ入っていくと、オマワリが日本刀の長いのをもつて、警察の中で刺し殺しているんですよ。（中略）さあそばにいかれないから、もどると、刑事が、柔道の白い上着で黒い帯を腹にして、桜の棒をもつてなぐるうとするの。俺は、ともかく言葉を知らないから、ともかく手をあわせてあやまつたの。そうしたら、俺の片方の手を引つてぶタ箱に入れてしまつた。

② 桃太郎はかういふ罪のない鬼に建國以来の恐ろしさを与へた。鬼は金棒を忘れたなり、「人間が来たぞ」と叫びながら、亭々と

登えた椰子の間を右往左往に逃げ惑つた。

「進め！進め！鬼といふ鬼は見つけ次第、一匹も残らず殺してしまへ！」

（中略）鬼が島はもう昨日のやうに、極楽鳥の囀る楽土ではない。椰子の林は至る所に鬼の死骸を撒き散らしてゐる。桃太郎はやはり旗を片手に、三匹の家来を従へたまゝ、平蜘蛛のやうになつた鬼の酋長へ厳かにかういひ渡した。

①の「牛を殺す屠殺場」のような「真赤にそまつ」た警察の外の常軌を逸した光景と、②の「至る所に鬼の死骸を撒き散らしてゐる」という残酷な描写。芥川は数多くの震災に関する随筆の中で、逃げ遅れたらしい人びとの遺体が、埋葬もされずあちらこちらに野ざらしになつていたことを書いている。まだ余震も続いていた状況の中で、親しい者の埋葬さえままならない中、「屠殺」されるように殺されたおびたしい「不逞鮮人」の遺体がすぐに埋葬されたとは考えられない。街頭で突然殺された人びとも多かつたという。そのままに葬られた人びとの遺体は、さながら侵略された鬼が島のように無残に撒き散らされていたのではないか。

また、「ともかく言葉を知らないから、ともかく手をあわせてあやまつた」という証言と、「平蜘蛛のやうになつた鬼の酋長」もその風刺のように見える。当時の自警団や官憲と言へば、警備と称して街頭に立ち、怪しいと見るや手当たりしだいに捕まえて「教育勸語」と「パピペポ」などを言わせ、言えなければ朝鮮人と決めつけて激しい虐待を加えていたという。前章で抜粋した「大震日録」の中で、自警団として出かける圓月堂（渡辺庫輔）のいでたち「脇差を

横たへ、木刀を提げたる「様子を見れば、丸腰の被害者たちは殺されないよう「平蜘蛛のやうに」わけもわからず「ともかく手をあわせてあやま」るしかなかったであろう。

引用した方のお話はほんの一例にすぎない。しかし、これと似たようなことがどこでも起こっていたことは間違いないはずである。

現在確認されているだけでも実に六〇〇〇名以上の朝鮮人、七〇〇名以上の中国人が虐殺された当時、これはけっして珍しいことではなかったであろう。多くが民間で行われたこの虐殺の現場は、どこにでも転がっていた。そしてこれは、その当時自警団に所属していた芥川もまた当事者というもつとも身近な場所で見聞きしていたのである。これはすでに多くの先行研究において指摘があるので、有名な「帝都東京」の一文を抜粋するだけにとどめる。

僕はこの手紙を書いて了ふと、僕の家に充満した焼け出されの親戚故旧と玄米の飯を食ふのです。それから提燈に蠟燭をともし、夜警の詰所へ出かけるのです。以上。

この文章だけでなく、書簡や他作品の随所に自身が自警団に属していたことをうかがわせる記述が見られ、彼が自警団員であつたことは確かであると思われる。

いまひとつは、社会主義者弾圧事件の内ひとつである甘粕事件である。この事件はいくつかの弾圧事件の中でも最も大きく取り上げられていた。当時のメディアの比重は、甘粕事件V亀戸事件V朝鮮人・中国人大虐殺事件であつたと松尾氏は指摘している。この事件は、九月十六日、社会運動家として評判の高かつた無政府主義者の

大杉栄が、妻の伊藤野枝と幼い甥の橘宗一とともに、甘粕雅彦憲兵大尉らによつて虐殺されたというものである。大杉はその日避難していた実弟を見舞いに訪れ、甥の宗一少年を預かつて帰宅途中、尾行中の警官の眼前で憲兵隊に連行されたまま消息を断つた。これを聞きつけた新聞記者らが騒ぎ出したので、警視庁が内務省に報告し、陸軍大臣に問い合わせた結果、事態が判明した。それを踏まえたうえで、「桃太郎」を見てみよう。

餓ゑた動物ほど、忠勇無双の兵卒の資格を具へてゐるものはない筈である。彼等は皆あらしのやうに、逃げまはる鬼を追ひまはした。大は唯一嚙みに鬼の若者を噛み殺した。雉も鋭い嘴に鬼の子供を突き殺した。猿も——猿は我々人間と親類同志の間がらだけに、鬼の娘を絞殺す前に、必ず凌辱を恣にした……。

侵略のもつとも残酷な第四節の場面である。ここで指摘しておきたいのは、第三節の場面で鬼が島の風土などが語られるが、そのなかには鬼の老若男女が描写されている。しかし、ここで殺されているのは若い男と女と子どもだけである。抜粋した部分をもう一度見てほしい。犬が殺すのは「若者」、雉が殺すのは「子供」、猿が殺すのは「娘」である。かなり限定的な言葉ばかりが意図的に使われていることがわかる。私はここに甘粕事件の風刺を見る。「若者」は大杉、「娘」は伊藤、「子供」は宗一少年と考えると、この特定された組み合わせも納得できるのではないだろうか。

さらに、「桃太郎」には草稿が残されている。短いので、以下に全文を抜粋する。

桃太郎の本国へ帰った後、鬼が島の知事になったのは武断主義の犬である。犬は就任すると同時に、今後角を生やしてゐる鬼は死刑に処すと云ふ布告を出した。

鬼の角を奪はうと云ふのは犬の方寸に出たことではない。桃太郎自身の考へたことである。桃太郎の考へに従へば、桃太郎は勿論大猿雉はいづれも角を生やしてゐない。ゆえに鬼は子鬼から年をとつた鬼に至る迄、悉角を生やしてゐる。すると鬼の鬼たる所以は角にあると云つても好い。故に角にあるとすれば、完全に角を取り除かない限り、鬼を治すことは出来ぬ筈である。

犬は布告を出した後、嚴重に取締りを実行した。或時などは角のある鬼を一時に五百匹首を斬つたこともある。

この部分はすべてカットされ、「桃太郎」には一切描かれなかった。しかし、この「角」の風刺は朝鮮人・中国人などの民族や社会主義者という肩書きのみで殺された前述の朝鮮人ら虐殺事件や甘粕事件などに通じるものがある。

また、この草稿がもし「桃太郎」の中に収録されていたら、桃太郎の鬼が島侵略の大義のなさがもつと強調されたと私は考えている。その根拠としては、この「桃太郎」の中には、鬼と人間の確執がほとんど語られない。それどころか、鬼の方こそ人間を恐れており、嫌っているという描かれ方なのである。以下に抜粋するのは、鬼の祖母が孫に人間の恐ろしさを語って聞かせる場面である。

「お前たちも悪戯をする、人間の島へやつてしまふよ。(中略)人間といふものは角の生えない、生白い顔や手足をした、何ともいはず気味の悪いものだ。おまけに又人間の女と来た日には、その生白い顔や手足へ一面に鉛の粉をなすつてゐるのだよ。それだけならばまだ好いのだがね。男でも女でも同じやうに、嘘はいふし、欲は深いし、焼餅は焼くし、己惚は強いし、仲間同志殺し合ふし、火はつけるし、泥棒はするし、手のつけやうのない毛だものなのだよ……」

人間を嫌う鬼の描写はこのように詳細に書きこまれているにも関わらず、人間が鬼に対してはどう感じているのかなどはおろか、何事かにおいて対立的な関係にあるという描写すら見当たらないのはどうしたわけだろうか。冒頭で桃太郎が鬼が島征伐にでかけると聞き、老人夫婦が喜んで送り出したのも、桃太郎の腕白さに愛想をつかしていたがための「一刻も早く追ひ出したさ」からであり、その目的を歓迎していたという話はどこにもない。つまり、桃太郎はどこにも鬼を退治するだけの大義がないのである。この鬼が島退治に関する大義の曖昧さは、中村氏も指摘しているところである。以下は、桃太郎の大義のなさが露呈する場面で、鬼の酋長と桃太郎との会話である。

「わたくしどもはあなた様に何か無禮でも致した為、御征伐を受けたことゝ存じて居ります。しかし實はわたくしを始め、鬼が島の鬼はあなた様にどういふ無禮を致したのやら、とんと合點が参りませぬ。就いてはその無禮の次第をお明し下さる譯に

は参りますまいか？」

桃太郎は悠然と頷いた。

「日本一の桃太郎は大猿雉の三匹の忠義者を召し抱へた故、鬼が島へ征伐に来たのだ。」

「ではそのお三かたをお召し抱へなすつたのはどういふ譯でございますか？」

「それはもとより鬼が島を征伐したいと志した故、黍団子をやつても召し抱へたのだ。——どうだ？、これでもまだわからないといへば、貴様たちも皆殺してしまふぞ。」

鬼の酋長の質問にひとつも答えていないにも関わらず、桃太郎はそれが正しく答えてであると確信しているかのような堂々たる態度なのである。その姿は滑稽でさえあるが、どこかそら恐ろしくも感じさせる。そしてこの大義のなさが、朝鮮人虐殺にはじまるすべての弾圧事件のもととなった根も葉もない流言飛語を暗示しているように思われるのである。出所もわからないきわめて曖昧な流言飛語によつて朝鮮人・中国人や社会主義者であるというだけで虐殺された数々の弾圧事件と、これもまた曖昧な大義によつて「鬼」というだけで退治される「桃太郎」の筋書き。これが何の意図もなく偶然似ているのだとは考えがたい。

三 まとめ

「桃太郎」より少し前、芥川は「將軍」『改造』を発表している。これは「初期プロレタリア小説」や「反戦小説」的な要素を持つて

いる作品である。しかしそのせいで検閲に引掛かり、たくさんの伏字が見られ、そのことを芥川が不快に感じていたということは中間発表で指摘した。そこを踏まえると、この「桃太郎」という作品は異彩を放つて見えてくる。

「桃太郎」には伏せ字はひとつもない。しかし作品の風刺を探ってみると、「不逞鮮人」を擁護し、社会主義者弾圧を批判するような内容が盛り込まれている。その時代のただ中にいた人々の中には、「桃太郎」を読んでもすぐにそれぞれの事件をつなげられた読者も多かったのではないだろうか。当時、朝鮮人・中国人大虐殺事件は、甘粕・亀戸両事件に比べメディアの比重が極端に小さく、人々の関心も低かった。そんな中で、この事件を告発し世に広めようとした芥川には、知識人として社会をリードしようとしていた啓蒙家の一面が見えてくる。プロレタリア文学も、それである前にまず芸術でなければならぬと言つた芥川は、人一倍芸術に対して真摯であり、そして芸術家としてのプライドも人一倍高かつたであろう。そんな彼だからこそ、作家という芸術家として無粋な伏字のない、完全な芸術作品を世に出したいと思つたのではないか。芸術家でありながら啓蒙家としての役割も全うしようとした芥川の伏字だらけにされた「將軍」からおよそ二年、その試みとしての作品に「桃太郎」を挙げ、試みは見事に成功していたと私は結論したい。

おわりに

これまで、芥川には社会性の欠けた、本のなかでしか生きられなかつた作家という評価がついて回つていた。近年ではその評価に異

を唱える研究も多くなつてはきたが、その材料となる作品が限られている気がする。少なくともこの「桃太郎」のようなわかりやすい風刺小説が捨て置かれてきたことを考えれば、そう言わざるを得ない。前章に述べたような見方からも、「桃太郎」はもつと評価されていいはずだ。

「不逞鮮人」という言葉が伏字になる時代に、一文字も伏せられることなく朝鮮人・中国人大虐殺事件を鮮やかに風刺してみせたこの「桃太郎」という作品は、単行本にも収められることなくひっそりとフエードアウトしていった。しかし、大衆文学を世に定着させることとなつた『サンデー毎日』という大きな雑誌に掲載された「桃太郎」は、おそらく多くの人の目に触れ、読まれたことであろう。そして震災を体験した人びとのうち何人かは、もしかしたらハッとさせられたかもしれない。そしてさらにまたそのうちの何人かは、それによつて啓蒙されたかもしれない。それがもしたつたひとりだったとしても、芥川はきつと字野の言う「いつも、いたづらをしたリ、皮肉をいつたり、する時に、してみせる」という「例のニヤヤ笑ひ」をしていることだろう。

「種をまく」という言葉があるが、この場合は農業や林業の話ではなく、思惟の話である。伝えたその時にはわからなくとも、何カ月、あるいは何年もあとになつてからでもわかるように、形式だけでも覚えておいてもらう。そういった言葉や行動を「種をまく」と表現するが、私は芥川の作品を読んでいるとしばしばそういう意識が見える気がするのである。「桃太郎」でもそうだが、蒙昧な人を突き放すのではなく、「例のニヤニヤ笑ひ」をしながら先で待っているような、ここまでおいでとも言ふような、まさに種をまかれてい

る印象だ。そして、そこには人間社会に絶望して自殺する厭世家ではなく、人びとの先頭に立つて社会を見据える皮肉屋の啓蒙家がいるのである。他人に勝つことや負けないことばかりが評価されるようになつてきている現代、このような芥川文学がこれからもつと評価されていくことを切望する。

— 関口安義ほか編『芥川龍之介全作品事典』（勉誠出版、二〇〇〇年六月）
— 吉川清氏編『いわれなく殺された人びと』（青木書店、一九八三年九月）